市制施行60周年記念

松原歴史ウォーク

1北東コース

松原市

はじめに

今年、松原市は市制施行 60 周年を迎えました。昭和 30 年 (1955)2 月 1 日に 2 町 3 村が合併した当時の 3 万 6 千の人口も、現在では 12 万 2 千人を擁するまでに発展しております。

この度 60 周年を記念し、本市文化財保護審議会委員の西田孝司先生に長年にわたりご執筆いただいている『広報まつばら』掲載「松原歴史ウォーク」を別本として刊行する運びとなりました。

本書では、全国 5 番目の大きさを誇る河内大塚山古墳、河内で初めて造営された第 18 代反正天皇の丹比柴籬宮、また難波宮から古都飛鳥に通じる最古の官道の竹内街道、大和から伊勢への長尾街道、高野山詣で賑わった高野街道などの古道のことや、その路傍の地蔵や道標のことなど、多岐にわたる内容が興味深く紹介されています。

わたくしは、今後も子どもから元希者まで、皆さんとともに歴史と伝統を重んじ、安心で安全なふるさと松原の発展につくしてまいることをお約束するとともに、本書がふるさと松原の魅力を知る一助になることを、心から願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたりご協力をいただきました西田先生をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成 27 年 10 月 1 日

松原市長　澤井　宏文

序

『広報まつばら』誌上に「松原歴史ウォーク」を掲載していただいたのは、平成９年 (1997) １月号でした。毎月の連載でしたので、本年 11 月号で 220 号を数えることになりました。『広報まつばら』には、すでに昭和 47 年 (1972) ５月号から昭和 52 年 (1977)11 月号までの 5 年あまりにわたって 45 回におよぶ「松原の史蹟」を連載させていただいたので、２度目の執筆ということになります。

私は、昭和 45 年 (1970) に考古学者である恩師の末永雅雄先生 (奈良県立橿原考古学研究所長) のすすめで、発足したばかりの松原市史編さん室に入りました。私の専攻は日本古代史で、なかでも天皇陵古墳を研究しており、文化財の保護活動と共に、今も調査を続けています。ですから、松原の歴史を 20 年近くも１人で書けるとは思ってもいませんでした。それでも、資・史料所蔵者や寺社関係者など多くの方々にお教えいただけたことから、新たな松原を少しは発掘することができるようになりました。同時に、松原の歴史を限られた地域史の枠ではなく、日本史全体の中で、どのような位置づけができるかを考えることに努めてきました。

今回、広報に連載したテーマをできるだけ知り、歩いてもらえるよう、関連ナンバーをまとめ、再構成しました。松原に多くの歴史遺産があることを認識していただき、誇るべき歴史・文化都市としての松原を市民の方々が共有していただければと思います。

私も、松原の魅力を国内外に発信していくつもりです。本書４巻 (北東・南東・南西・北西コース) をまとめる機会を与えていただいた松原市、および編集の労をとってくださった松原市教育委員会・㈱地域文化財研究所の皆さまに厚くお礼申し上げます。

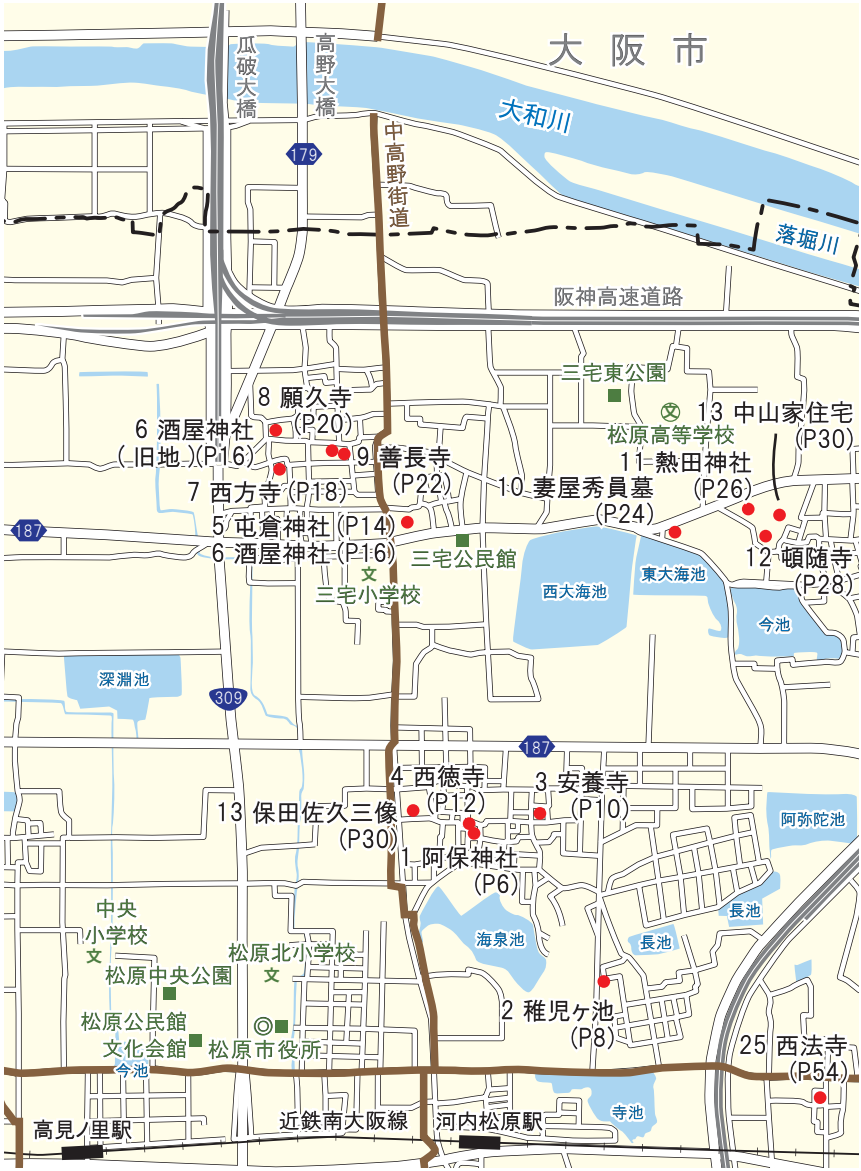
平成 27 年 10 月１日

西田孝司 (松原市文化財保護審議会委員)

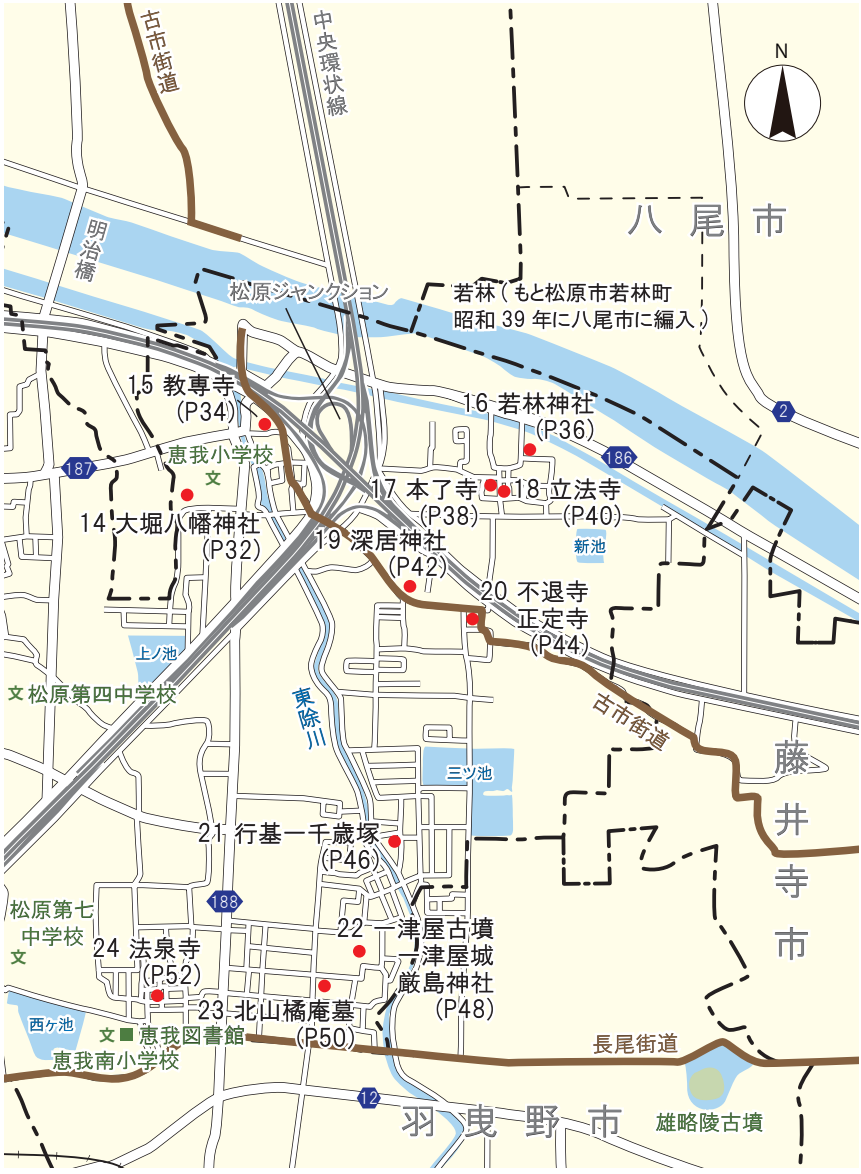
目　次

1．コース図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4 - 5
1　阿保神社と阿保親王・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2　稚児ヶ池に沈んだ幼子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
3　東阿保村の安養寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
4　西徳寺住職と学校教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
5　屯倉神社と天神信仰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
6　酒屋神社と神への造酒・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
7　西方寺に移った平安期の仏・・・・・・・・・・・・・・・・・18
8　願久寺の文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
9　善長寺と樋口・大橋氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
10『積翠集』を残した妻屋秀員 ・・・・・・・・・・・・・・・・24
11　熱田神社と日本武尊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
12　頓随寺と阿弥陀如来像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
13　国の登録文化財・中山家住宅・・・・・・・・・・・・・・・・30
14　大堀八幡神社の遷座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
15　大堀村の教専寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
16　若林神社と若林の陣跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
17　長尾氏が創建した本了寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
18　立法寺の創建と住職・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
19　深居神社と小川の戸関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
20　小川村の不退寺と正定寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
21　小川墓地の行基一千歳塚・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
22　一津屋古墳と一津屋城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
23　漢詩文に秀でた医師北山橘庵・・・・・・・・・・・・・・・・50
24　法泉寺の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
25　西野々村の地名と西法寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

※本文の柱下段のナンバーは、広報『松原歴史ウォーク』連載時の番号です



4　市域を国道 309 号線と府道堺・大和高田線 (12 号) を境として、北東・南東・南西・北西の 4 コースに分けました。



■はトイレのある公共施設です。

1 阿保神社と阿保親王

阿保の地名は阿保親王から？　　阿保５

市役所の所在する阿保の読み方は珍しいでしょう。「あお」と読みます。地名の由来は、平城天皇の第１皇子である阿保親王の別荘地が当地にあったといわれているからです。

親王は、平安時代初頭の弘仁元年 (810) に起こった薬子の変 (嵯峨天皇の時代、藤原薬子・仲成兄妹が平城上皇の復位をもくろんだ事件) に関連して、大宰権帥として九州へ左遷されましたが、のち許され、承和元年 (834) に河内国丹比郡田坐に別荘を造営したと伝えられています。田坐の地は、現在の阿保から田井城のあたりに当たると考えられています。

『続日本後紀』によれば、親王は性格は謙退で、文武の才能を兼ね、絃歌に秀でていたといいます。しかし、承和９年 (842) に 51 歳で亡くなりました。六歌仙の１人である在原業平は、阿保親王と桓武天皇皇女の伊都内親王との間に生まれた第５子です。

海泉池の一部を埋め立てて、道夢館や阿保公民館が建っており、その北側に阿保神社が鎮座しています。菅原道真を祭神としますが、本殿の北に並んで阿保親王を祀る親王社が合祀されています。また、本殿の南側には、幹周約 485cm、高さ約 20m、根株張５～６m にもおよぶクスの巨木が天をおおっています。1200 年前の阿保親王お手植えと伝えています。本殿前に「史跡阿保親王住居址」の石碑も建っています。

阿保のほぼ全域 (１丁目～７丁目) は阿保遺跡とよばれ、弥生時代から近世に継続する集落遺構が見つかっています。このうち、阿

保５丁目の阿保浄水場周辺や、長尾街道北側の阿保４丁目では、平安時代の掘立柱建物跡が確認されました。また、海泉池に接する阿保５丁目からは、平安時代から鎌倉時代にかけての海泉池を利用した灌漑用の溝や井戸が検出されています。親王の別荘を想定させる遺構は見つかっていませんが、平安時代の開発の様子がうかがえます。

阿保親王が河内国丹比郡に別荘を造営したと伝える背景には、平城天皇の更衣（後宮の宮女）であった母の葛井宿禰藤子との関わりが考えられます。葛井氏は百済系渡来氏族で、飛鳥時代から奈良・平安時代、河内国志紀郡長野郷（藤井寺市）を本居としていました。

７世紀半ばに建立された葛井寺は、葛井氏の氏寺でした。永正７年（1510）、三条西実隆が記した寺記や『西国三十三所名所図会』には、阿保親王が同寺を再興したと伝えています。親王の母が葛井氏の出身であったことから、伽藍の修復をしたと伝えられたのでしょう。

ただ、阿保の地名については親王とは別だという考え方もあります。奈良時代の『続日本紀』天平 19 年（747）９月２日条に、東大寺大仏造営のために銭千貫文を寄進した河内国人初位下阿保連人麻呂が見られます。阿保連氏の出身地と、阿保神社との関わりにも注意が必要です。

阿保神社

2 稚児ヶ池に沈んだ幼子

稚児を弔う卒塔婆が池の中に建立　　松ヶ丘１

河内松原駅の西側を通る中高野街道を北へ向かうと、すぐ東西を走る長尾街道にぶつかります。阿保茶屋です。ここを右折して200m ほど行くと、南側に寺池があり、街道をはさんでその前は宅地化され、マンションなどが建っていますが、もともとは稚児ヶ池とよばれる大池が見られました。いまでは松ヶ丘と住居表示が変わりましたが、江戸時代以降、阿保村の地でした。

稚児ヶ池といういわくありげな名は、江戸時代前半の延宝７年(1679) に書かれた『河内鑑名所記』に「いつのころか、幼児がこの池にはまって亡くなったので、親は稚児を弔うために長さ５間 (約９m) の卒塔婆を池の中に立てた」ためだと紹介しています。のち棒状の卒塔婆が人々の心に焼きつき、棒池ともよばれるようになりました。後世の人々も、卒塔婆が朽ちると立て直したようで『河内鑑名所記』の挿絵にも、池中に卒塔婆の立っているようすが描かれています。

一方、稚児ヶ池や棒池の由来は、平安時代初期に阿保の地に居住していたと伝わる阿保親王 (平城天皇の皇子) 伝説から受け継がれてきたともいわれています。

伝承によると、阿保親王の子孫という在原信之が阿保に住んでいましたが、早世しました。子の幸松麿は当時、13 歳の稚児でしたが、母が重い眼病にかかりました。幸松麿は我が身を犠牲にしても、母の全快を祈って観音信仰の葛井寺 (藤井寺市) に願を懸けました。満願の日に母の病いが治りましたので、幸松麿は観音に身を捧げるため、池に入水したのです。時に、平安時代後期の長和３年 (1014)

６月 15 日のことと伝えています。

まもなく、人々は幸松麿の孝養を哀れみ、池の中に卒塔姿を立てたといいます。

同時に稚児ヶ池や棒池と共に、幸松麿が阿保親王の子孫ということから、親王池（しんのういけ）という名も広まるようになりました。池は広大な阿保親王の邸宅の中に掘られた灌漑池だという伝えもあるほどです。

このように、稚児ヶ池は江戸時代の地誌にもガイドされる河内の名所旧跡の１つでした。校区の松原北小学校校歌のタイトル「愛のさざなみ」の「さざなみ」は稚児ヶ池を歌っています。阿保墓地 (阿保７丁目) の東側に新しくつくられた南北の計画道路沿いに「稚児ヶ池跡」の説明板が建っています。

なお、埋めたてられたとはいえ、同池は池の築造と古道の設置を考えるさいにも、注目すべき問題を提供しています。つまり、長尾街道をはさんで南側にある寺池は形からみて、稚児ヶ池とは同じ１つの池の可能性が高いでしょう。長尾街道は、７世紀ごろにつくられた大津道（おおつみち）という古道を引き継いだと考えられています。先に池があって真ん中に古道がつくられたのか。あるいは、先に古道があったのか。興味はつきません。

稚児ヶ池跡説明板

3 東阿保村の安養寺

慈願寺・東本願寺が関わった真宗大谷派　　阿保６

阿保の地は、江戸時代前半までは丹北郡阿保村でしたが、のち東阿保村と西阿保村に分かれました。明治８年(1875)、東西両村が合併して、再び阿保村が形成されたのです。正保２年(1645)の郷帳に書かれた村の石高に東西阿保村が分けられています。ただ、のちの史料にも阿保村のままが多く、東西の区別は厳密ではなかったかもしれません。

このうち、東阿保村のいまの阿保６丁目に真宗大谷派の安養寺が建っています。寺の過去帳に、初代住職と思われる釋宗念が寛文12年(1672)10月25日に亡くなったとありますので、寛文年間までに創建されていたと考えられます。

安養寺は、江戸時代後半までは本山の東本願寺の直末ではなく、八尾に建てられた慈願寺の下にありました。慈願寺は東本願寺に属しながら、河内を中心に摂津や大和などに30ヵ寺の末寺を持っていました(明治４年)。松原でも、安養寺の他、新堂の良念寺、河合の稱念寺、上田の福應寺、小川の不退寺もその末寺でした。

慈願寺に残る文書に、天和２年(1682)９月20日、安養寺に対して「木佛寺号御免状」「慈願寺下河州丹北郡阿保村惣道場安養寺」とあり、本尊の阿弥陀如来像と安養寺の寺号が与えられました。翌天和３年(1683)４月７日には「祖師御免状」とあり、開祖親鸞聖人絵像が下されています。翌貞享元年(1684)霜月(11月)27日にも、東本願寺14世の琢如上人絵像が下付されました。正徳３年(1713)になると、聖徳太子絵像やインド・中国などの七高祖絵像も与えられています。

寺に祀られるこれらの絵像には、年号は見られないものの、裏書

があり、そのうち琢如上人絵像には「河州阿保村惣道場安粮寺」とあります。聖徳太子や七高祖像にも、それぞれ「河刕丹北郡阿保村惣道場安養寺」とあります。安養寺には、文政６年(1823)11月21日、東本願寺20世の達如が尼講に下した「御文」も蔵されています。そこには、「慈願寺下河州丹北郡東阿保村安養寺 尼講中」とあり、江戸時代後半には東阿保村は定着しています。

幕末の嘉永７年(安政元年、1854)６月14日、大地震が起こり、松原地方も大きく揺れたようです。いわゆる安政の南海地震です。和歌山・大坂などは甚大な被害を受け、多くの犠牲者が出ました。この時、安養寺では本尊の阿弥陀如来立像を守るため、台座や光背から本体をはずし、木箱に入れ安全な場所に保管しました。木箱には「御本尊様御箱」と書かれ、時の看坊(住職)であった鳳鳴が大地震の様子を簡潔ながら、記しています。

現本堂は昭和 63 年に改築されましたが、棟札によると、本堂は文政３年 (1820) ４月上旬に、松原村新堂の大工棟梁、伊藤嘉兵衛豊久らによって建てられたものです。安政２年 (1855) に再建された、同じ真宗大谷派で西阿保村の西徳寺も、新堂の伊藤利助によって建てられています。

安養寺

4 西徳寺住職と学校教育

松原小学校初代・３代校長 千賀氏を生んだ真宗大谷派　阿保５

真宗大谷派の西徳寺(阿保５丁目)は、寛政10年(1798)正月に記された『道場目録帳』や江戸期以降の覚書である『西徳寺常住物之覚』などによると、室町時代の永正３年(1506)４月に開創したと伝えています。道入という僧が、本願寺８世の蓮如に帰依して法名を与えられ、道場を建立したことが始まりです。

江戸時代に入って、４代浄了の寛永９年(1632)４月に本尊(阿弥陀如来像)が、本山の東本願寺13世宣如から下されました。寛文６年(1666)には、東本願寺15世常如より、２月に聖徳太子絵像、11月に七高祖絵像や宣如上人真影・親鸞聖人真影を下されています。

この頃には、「河内国丹北郡阿保村惣道場西徳寺」の寺号も見られ、藤井寺市沢田の極楽寺が上寺となっていましたが、本山との仲介をとったのは八尾御坊の大信寺でした。

ところで、平成22年に再建された新本堂の前の旧本堂は、10代了教が48歳の時の安政３年(1856)４月に上棟されたものです。その時の棟札『奉納棟札記』によると、阿保村庄屋の保田仁兵衛らから前年の安政２年(1855)11月に大坂西町奉行所に「再建願御免」が出され、新堂村(松原市新堂)の利助が大工棟梁となりました。

利助の姓は、伊藤氏。融通念仏宗の浄光寺(新堂３丁目)を檀那寺としており、先代利助と共に幕末に浄光寺本堂を再建したり、雄略天皇陵(羽曳野市島泉)の修復に際し、木製鳥居をつくったりしました。

棟札には、釈迦如来の金言と共に、天照大神の託宣も受けていると記し、本堂が神仏に守られていると考えられていたのです。

同寺には、安政３年時の『本堂再建附込帳』も残されていました。そこには、御遷仏法要に参勤した同じ真宗大谷派の岡の円正寺、河合の稱念寺、田井城の陽雲寺、上田の願正寺・福應寺、新堂の良念寺、立部の栄久寺、西野々の西法寺、三宅の玉應寺のほか、堺市北区金岡、大阪市東住吉区田辺、八尾市沼、大阪狭山市半田の寺々の名前も見られます。同じ阿保村の安養寺(阿保６丁目)や、明治時代に廃寺となった西照寺(阿保６丁目の阿保東部第一公園の東側)も法要のお世話を担っています。

明治５年(1872)、小学校が誕生する前に郷学校と称する初等教育機関ができ、市域にも９ヵ所の郷学校が設置されました。西徳寺も、その郷学校のうちの１つとなって生徒45名(男30、女15)が学び、11代住職の千賀了雄が習字教師として教えています。了雄は、のち三宅小学校の教員になりました。明治７年(1874)、松原小学校が上田に設置されますが、同校初代校長は了雄の３男であった了彦が就任し、次男の了隆も第３代校長を勤めました。

千賀氏が地域の学校教育にも関わったことが知られ、阿保墓地中央に三宅小学校時代の教え子が建てた明治26年(1893)に亡くなった了雄の墓があります。

西徳寺

5 屯倉神社と天神信仰

菅原道真ゆかりの貴重な文化財　三宅中４

三宅中４丁目に鎮座する屯倉神社は、天慶５年 (942) に菅原道真を祭神として創祀されたと伝えています。屯倉の名は、古墳時代に天皇家の直轄地であった依網屯倉が存在したと伝わっているからです。

当地にはもともと、土師氏 (のち菅原氏に改姓) の祖神である天穂日命を祀る穂日の社があり、のち同地に屯倉神社が祀られ、依羅三宅天満宮ともよばれるようになりました。

本殿には神像として菅原道真像が安置されています。総高 99.7cm、総幅 128.3cm、膝張 78cm の等身大です。体部は近世の作ですが、挿首形式の頭部は南北朝時代の古様を示しています。

天神信仰の広がりにつれ、屯倉神社には道真に関わる伝承品が多く残されています。近世の近衛信尋自画賛の渡唐天神像、後陽成天皇の手になるという菅原道真画像、近衛基熙筆の「南無天満大自在天神」名号などは代表的なものです。

社務所のあたりは、神宮寺の梅松院があったところです。僧侶が神官を兼ねていましたが、明治初期に廃寺となりました。このため、社宝にも神仏習合が見られ、神像の道真像の体内に元和８年 (1622) に書かれた仏教の丹生講式や柿経の法華経八巻、および舎利二粒が納められていました。これらは道真への供養品だったのでしょう。

ところで、道明寺天満宮 (藤井寺市) 蔵の『道明尼律寺記』(享保 11 年－ 1726) によると、道真が右大臣にのぼりつめたころ、叔母の覚寿尼が土師氏 (菅原氏) の氏寺である道明寺の住持になっていました。延喜元年 (901)、道真は左大臣の藤原時平の中傷によっ

て大宰権帥に左遷されました。道真は京都から九州におもむく途中、道明寺に立ち寄り、覚寿尼に別れを告げたと伝えています。

この享保 11 年、同じく屯倉神社でも『三宅天満宮梅松院縁起』がつくられますが、同縁起には、道真は道明寺で叔母と別れたあと、三宅の穂日の社へ立ち寄り、石に座して祖神の天穂日命に無実の罪をはらすことを祈ったと記されています。

道真が座したと伝える石は「神形石」とよばれ、いまも拝殿前に石垣で囲まれて祀られています。長さ 180cm、幅 110cm、高さ 35cm ほどの扁平な石です。宮司の妻屋氏は、江戸時代末期の文久２年 (1862) ９月に「神形石」の標柱を建立しました。同石は鉢伏山 (羽曳野市飛鳥・駒ヶ谷) で採れる石英安山岩です。鉢伏山には７世紀代の古墳が多く築かれており、鉢伏山南峰古墳や西峰古墳の横口式石槨のように、その墓室に当地の石英安山岩を利用しています。

三宅には全壊しましたが、土師ヶ塚古墳や権現山古墳が築造されていましたので、古墳の石室の一部が神形石に利用された可能性もあります。「神形石」が土師氏 (菅原氏) の墓とする土師ヶ塚のものだという伝承もあるほどです。社務所の庭園には「土師墳」と刻んだ自然石も移されています。

屯倉神社

6 酒屋神社と神への造酒

中臣酒屋連氏が氏神として祭祀　　三宅中４・６

平安時代の延長５年 (927) に『延喜式』が完成しました。これは、８世紀～ 10 世紀初頭にかけての律令法の施行細則を集大成した法典です。『延喜式』のなかには、神祇官式の項目があります。その神祇官式には、10 世紀初頭当時の官社の国郡別一覧表ともいうべきものが載せられています。

官社は、祈年祭にあたって国家から幣帛をうける由緒深い神社であり、延喜式内社とよばれています。全国に 2861 社が記されており、河内国は 113 社を数えました。

この時期、松原は河内国丹比郡に含まれていました。丹比郡には 11 社の延喜式内社があり、市域では、三宅の酒屋神社や田井城の田坐神社と天美地区の氏神である阿麻美許曽神社の３社が見られます。

このうち酒屋神社は、融通念仏宗の西方寺 (三宅中５丁目) の北側に鎮座していましたが、明治 40 年 (1907) ４月に屯倉神社 (三宅中４丁目) に合祀されました。屯倉神社本殿の北側に、社号標石や石灯籠と共に移されています。旧社地は、いまでは三西町会児童公園 (三宅中６丁目) になっていますが、その地の北には前方後円墳の権現山古墳が築造されていました。権現山古墳は全壊していますが、その名の由来は、酒屋神社が酒屋権現ともよばれていたことによります。

社地の西側に酒蓋池があり、その池の東北に「酒屋井」という井戸があって、そこから酒屋神が出現したと伝えています。この酒蓋池は昭和 39 年 (1964) に埋め立てられました。

酒屋神社の「酒屋」名は、酒造に関係したものと思われますが、

同社は津速魂命を祀っています『新撰姓氏録』の河内国神別に「中臣酒屋連　津速魂命　19 世孫真人連公之後也」とあります。

当時の各氏族の名簿録ともいうべき『新撰姓氏録』が編集された弘仁６年 (815) ごろ、三宅に有力氏族の中臣氏の一族である中臣酒屋連が住んでおり、津速魂命の 19 世孫の「真人連公」を祖先としていたのでした。氏族名から分かるように、同氏は酒造を担当しており、祖先神を酒屋神社として祀ったのでした。

三宅の地は、皇室領の依網屯倉の故地にあたると推定されています。『延喜式』玄蕃寮式に、朝鮮半島の新羅国からの使節をもてなす際に「神酒」を三宅の近くの摂津の住道神社 (大阪市東住吉区住道矢田の中臣須牟地神社) で醸酒していることが記されています。

このことから、中臣酒屋連は依網屯倉で収穫された米で酒造をしていたと考えられます。もともと、中臣氏は神事に関わる職掌を世襲していましたので、酒は神に捧げるものとしてつくられたのでしょう。中臣氏の一族に中臣酒人宿禰氏も河内近辺におり、やはり酒造にあたっていたと思われます。

『日本三代実録』(901 年成立の勅撰の歴史書)によると、酒屋神社は清和天皇の貞観７年(865) 12 月に従五位下を授かっています。

酒屋神社

7 西方寺に移った平安期の仏

梅松院の十一面観音像と豊興寺の阿弥陀如来像　　三宅中５

三宅中５丁目の古い町並みが残る一角に、融通念仏宗の安養山西方寺が建っています。同寺は、融通念仏宗総本山の大念仏寺 (大阪市平野区) 7 世住職の法明が、鎌倉時代末期の元亨年間 (1321 ～ 23) に創建したと伝えられています。本堂に祀られる本尊および客仏の阿弥陀如来像は平安時代後半の古仏です。また、観音堂にも、古仏が安置されていることで有名です。

観音堂の仏像は、近くの屯倉神社の神宮寺であった梅松院の本尊・十一面観音像です。平安時代後半の作で、像高 90cm。ヒノキの一木造、漆箔に仕上げられています。ふっくらとした丸顔で、体部は肉取りが厚く、やや反り身です。

本像は三宅だけでなく、各地の人々に信仰されたことは、江戸時代後半 (18 世紀) につくられた木製刻画の版木が現存していることからもわかります。版木に紙を貼って墨を塗り、紙に刷られた観音さまが大量に生産されました。版木は大和・長谷寺式の十一面観音像を中央に配し、「天満宮本地　十一面観世音　聖徳太子御作」「河内国丹北郡三宅邑梅松院」と記しています。天満宮とは屯倉神社のことで、明治時代以前は、神も仏も同じとする神仏習合が一般的でした。

享保 11 年 (1726) に書かれた『三宅天満宮梅松院縁起』には、聖徳太子が仏敵退散を願って本像をつくり、蘇我馬子に賜わったとあります。やがて、7 世紀の皇極天皇の時に三宅の豪族、土師敏傍が譲り受けて屯倉の杜に祀ったこと。また、平安時代前期には菅原道真が九州へ配流される途中、叔母の覚寿尼がいた道明寺 (藤井寺市) にい

とまごいをして帰る際、本像に御加護を祈ったとも伝承されています。

明治４年 (1871)、梅松院は廃寺となったことから十一面観音像は西方寺に移されました。本像は、方違(かたたがえ)や安産に霊験あらたかと信じられていましたので、西方寺は昭和 50 年代まで、河内西国３番札所として、多くの人々が朱印のため参詣しました。「今世をばかけてぞたのむ三宅寺　神も仏もへだてなければ」の御詠歌(ごえいか)が境内に響きわたったものです。三宅寺とは屯倉神社にあった梅松院のことで、地名をおりこんでいます。

本堂の客仏は、やはり平安時代後半につくられたと思われる阿弥陀如来立像です。像高 67cm。ヒノキの一木造です。肉身は金泥漆箔。撫(な)で肩で肉づきが厚く、穏やかなお顔です。

本像は、融通念仏宗の仏法山豊興寺(ほうこうじ)の本尊でした。豊興寺は、西方寺と同じく法明の念仏勧進(かんじん)道場としておこり、三宅中４丁目の東集会所の地にありました。明治 30 年 (1897)、豊興寺は廃寺となり、阿弥陀如来像が西方寺に移されたのです。旧地には、豊興寺地蔵が祀られています。

現在、観音堂の前には西国三十三ヵ所の各本尊を安置する御影堂もあり、西方寺は市域でも数少ない観音信仰の寺といえるでしょう。

西方寺と観音堂

十一面観音像

8 願久寺の文化財

平安後期の本尊と戦国期の本願寺歴代の名品　三宅中５

三宅中５丁目に、真宗大谷派の願久寺があります。近接して同じ大谷派の善長寺や玉應寺も建っています。３寺は、毎年３月 28 日にまわり持ちで「お名号会」とよばれる親鸞聖人筆と伝える「南無阿弥陀佛」のお名号を当番で守り、法要を行っています。

願久寺の山号は慈光山。もともとは天台宗でしたが、戦国時代の永正 11 年 (1514)、浄琢を中興の祖として浄土真宗に改宗したといわれています。本堂前には宝暦９年 (1759)10 月に建てられた願久寺歴代住職墓や山門左側に享和元年 (1801)、瓜破村 (大阪市平野区) の瓦屋によってつくられた大鬼瓦が見られます。

本堂内陣に祀られている本尊の阿弥陀如来立像は、平安時代後期の藤原様式をもつ古仏です。寄木造で、滝のように流れ落ちるＹ字形に似た衣文をまとった豊満な体躯が信仰を持つ人々の心に訴えます。村々の真宗寺院の本尊に、平安時代の阿弥陀如来像が祀られることは多くありません。

本尊の背面に「寛文八歳 鳥大仏師七十九代運阿弥極之□ 慈覚大師御作 戊申 当寺本尊也願久寺釋浄賢」とあります。同仏は、飛鳥寺 (奈良県) の飛鳥大仏をつくった止利仏師に連がる運阿弥と天台宗延暦寺３世の慈覚大師円仁の作と伝えています。江戸時代の寛文８年 (1668)、５代住職浄賢の時に他寺で祀られていた本像を願久寺の本尊として迎えたと思われます。

当寺は、本願寺歴代にゆかりのある品々が所蔵されていることでも知られています。まず、裏書に記された花押などから本願寺８世

蓮如が文明５年 (1473) ６月 18 日に下付したと考えられる阿弥陀如来絵像があります。いわゆる「方便法身尊像」とよばれるものです。やや大ぶりの像に 48 条の光明のうち、１条が真上に突き抜ける形式になっています。寺では、江戸時代初頭ごろ、本願寺 12 世教如より賜ったと伝えています。

願久寺 13 代住職の浄弘は、のち東本願寺をおこした教如と親密な関係を持ち、教如が河内一円を布教して、慶長 12 年 (1607) に八尾別院 (八尾市の大信寺) を建立するとき、土地や門徒を提供して協力したほどです。

戦国期の本願寺９世実如の直筆とされる「南無阿弥陀仏」の六字名号も貴重です。実如の父蓮如は、宗祖親鸞の遺訓を守って名号を本尊として、これを書写して多くの門徒に与えましたが、実如も父の書風を守って名号を残しました。その書風は、蓮如と比べて丸みが強いといわれています。ほかにも、先の浄賢は寛文元年 (1661) に親鸞聖人絵像、寛文３年に聖徳太子絵像や七高祖絵像を東本願寺 13 世琢如より下付され、いまも本堂に祀られています。

なお、願久寺は南隣する善長寺と共に、明治７年 (1874) に三宅小学校が設けられた場所でもあります。

願久寺

9 善長寺と樋口・大橋氏

善左衛門・長右衛門の名をとった真宗大谷派　　三宅中５

三宅中５丁目に、仏光山善長寺が建っています。真宗大谷派で、京都の東本願寺を本山とします。戦国時代の文明元年 (1469)、成教が三宅村の道場として、開いたと寺伝にあります。

善長寺の名は、江戸時代前期に近くの樋口家の先祖である樋口善左衛門の善と、大橋家の先祖にあたる大橋長右衛門の長をとって付けられたと伝えています。代々、樋口氏当主は善左衛門を、大橋氏当主は長右衛門を名のり、両家は中高野街道の西側に面していました。

現在、樋口家に４種類の同家系図が保存されています。それらによると、樋口氏は古墳時代、南河内地方に勢力を持っていた豪族の丹比氏の子孫とします。のち、平安末期の源平合戦で、源 (木曽) 義仲の武将として活躍した樋口次郎兼光を中興の祖とし、樋口氏を名のったとあります。とくに、幕末の弘化２年 (1845) に亡くなった、丹比氏から 55 代、兼光から 28 代の樋口善左衛門好昌がまとめた系図は注目されます。この中で、明暦３年 (1657) に丹比氏 50 代、兼光 23 代と伝える善左衛門兼廣の時、「宿坊、兄弟違乱の事有り。仍りて別に道場を建立す。善左衛門、長右衛門両人の頭を取り、善長寺と号す」と記しているのです。

善長寺の上寺であった八尾の大信寺 (八尾別院) の史料に、明暦３年７月、東本願寺から宗祖親鸞聖人絵像を、同 12 月に東本願寺 14 世の宣如上人絵像を善長寺の浄了に下したとあります。明暦３年に寺号と共に絵像が与えられていますので、江戸時代前半に道場からいまのように寺院化したのでしょう。浄了は６代住職で、寛文

元年 (1661) に亡くなり、寺の中興の祖とされました。同寺の北に接する同じ真宗の願久寺の浄賢にも、３ヵ月後の明暦３年 10 月に、親鸞聖人絵像が大信寺を通じて東本願寺から下されています。

善長寺では、現住職の秦氏が代々、寺を守ってきたことから、寛文 11 年 (1671) 以降の檀家の過去帳が多く残っており、三宅村の門徒の様子を知るうえで非常に貴重です。

三宅・別所霊園 (三宅東３丁目) の正面、迎地蔵すぐ西側には、樋口善左衛門の名を刻む江戸時代後半の享保や寛保年間などの樋口家代々の墓石が祀られています。また、大橋長右衛門の名を記す幕末の文政や嘉永年間の大橋家代々の墓石も無縁墓西側に見られます。大橋氏は、徳川２代将軍秀忠、３代家光に仕えた書家の大橋龍慶を出した家としても有名です。寛永 19 年 (1642) につくられた大橋龍慶像は、大橋家から寄贈をうけた松原市が保管しています。

明治７年 (1874)、善長寺には願久寺と共に現在の三宅小学校が設けられました。また、明治初期から昭和初期にかけて三宅で盛んであった冠句 (雑俳の一種) の結社、好楽社の句会の場の１つともなりました。大正 10 年 (1921) ５月に建てられた好楽社の石碑が本堂前に見られます。

善長寺

10 『積翠集』を残した妻屋秀員

『古今和歌集』の伝統を継いだ三宅の歌人　　三宅東３

江戸時代、松原が生んだ文人の１人に妻屋秀員がいます。妻屋家は、三宅村の庄屋をつとめており、のち屯倉神社宮司家となりました。秀員は天和２年 (1682) に生まれ、通名を平治とよびました。

秀員は村役人の職務のかたわら、京都の烏丸光栄・光胤父子に和歌を学び、号を可雪と称しました。光栄は、細川幽斎を経て、のち後水尾天皇や霊元天皇に伝えられた『古今和歌集』(古今伝授) の流れを受け継いでいました。このため、秀員の歌は宮廷歌学の『古今和歌集』を手本としたといえるでしょう。

秀員は享保 15 年 (1730) から宝暦８年 (1758) の 29 年の間、作歌活動を活発に行ったようです。紀貫之や西行法師を慕い、歌風にもその影響が見られます。

秀員は京都で催される歌会や、和歌の神として崇敬されていた摂津の住吉大社での住吉会にも熱心に出席しました。また、秀員の母が狭山藩 (大阪狭山市) の家老である井出氏の娘であったことから、狭山藩主北条氏や狭山藩家老、あるいは狭山宮や狭山牛頭天王社の催す歌会にも頻繁に出かけました。こうしたことから、秀員は狭山で晩年を送ったほどです。

秀員は明和２年 (1765)、84 歳で亡くなりました。しかし、彼の詠んだ歌は死後２ヵ月を経て、遺言によって秀員と同門であった大坂の加藤景範が遺稿を校訂・書写して『積翠集』と名づけ、住吉大社に奉納しました。積翠とは、秀員が狭山池の畔に居をかまえた積翠亭によります。『積翠集』には、春 191 首、夏 100 首、秋 164 首、

冬 127 首、恋 71 首、雑 120 首、計 773 首がおさめられています。秀員の 48 ～ 76 歳ころの作品です。

秀員には故郷の三宅村を詠んだものが少ないのですが、『積翠集』には屯倉神社(三宅中４丁目)の歌会での次の２首が載せられています。

享保 15 年　月前神祇　三宅邑(むら)天満宮法楽

松杉のこのまさやかに影てらす　月夜よさミの杜(もり)の神かき

享保 19 年　立春暁　梅松院月次会(ばいしょういんつきなみえ)

山かつらくる春みちてあか星の　しらむ光も霞むのとけさ

三宅邑天満宮やよさミの杜とは屯倉神社のことで、梅松院はいまでは廃寺となっていますが、その神宮寺でした。

秀員の墓は、三宅の妻屋家の奥津城(おくつき)に建てられています。府道大堀－堺線で南北に分けられた三宅・別所霊園のうち、慶長(けいちょう)５年 (1600) につくられた大海池(おおがいいけ)寄りの南区画東北部に妻屋家墓所があります。江戸前期の元禄(げんろく)年間の墓石をはじめ、宝篋印塔(ほうきょういんとう)や無縫塔(むほうとう)も含んだ 30 基が２列に並んでいます。 秀員の墓は、中央前列に自然石で「可雪斎秀員叟」と刻まれています。

三宅・別所霊園の妻屋秀員墓

11 熱田神社と日本武尊

農業神となった白鳥伝説　　別所６

大阪府が明治 12 年 (1879) にまとめた『神社明細帳』によると、府内には 1909 社がありました。なかでも、全国各地でよく見られる流行神の八幡神社、八坂神社、天神社が府内の村々でも多く勧請されていました。八幡神・八坂神・天神は、いずれも農耕に欠かせない神でした。八幡神は穀霊神であり、のち武神として土地の守護神とされました。八坂神は五穀豊饒、厄病祓いの神と崇められています。天神は雷神であると共に、学問の神としても祀られたのです。

当時、市域には 13 社が鎮座していました。しかし、明治 40 年 (1907) 以後の合祀政策によって現在、府内では約 700 社、市域では 10 社に減っています。このうち、別所６丁目に日本武尊を祀る熱田神社があります。1900 社をこえた府内の神社で、日本武尊を祭神とするのは、堺市西区鳳の大鳥神社、羽曳野市古市の白鳥神社、寝屋川市太秦の熱田神社と、別所の同社のわずか４社にすぎません。

日本武尊は 12 代景行天皇の皇子。南九州の熊襲や東国地方の蝦夷を征討しましたが、大和に帰る途中、亡くなり、白鳥となって飛翔するという英雄伝説の主人公です。なぜ、別所に日本武尊が祀られたのでしょうか。伝承では、別所に住む僧が尾張の熱田神宮 (名古屋市熱田区) に詣で、祭神の日本武尊を勧請したといわれています。すでに江戸時代前期には「熱田大明神」として祀られていました。

別所の人々は、日本武尊を武神として崇拝したのでしょうか。そうではないと思います。京都の伏見稲荷大社の創建に関して、白鳥が稲や田の神の象徴となっていますので、白鳥は農業と深い関係が

あることが分かります。別所でもほかの農村と同じく、白鳥をシンボライズした農業神として祀ったのではないでしょうか。

府道大堀－堺線に面し、水上ゴルフ場に利用されている大海池の東側に熱田神社の杜が見えます。樹齢 400 年といわれるクスが天をつらぬいています。拝殿正面には、別所出身で、奥州盛岡（岩手県）で商売に成功した平野五郎兵衛が、父の五郎八が 12 歳の時に書いたものを元禄 16 年 (1703) ３月に奉納した「熱田大明神」の額が掲げられています。拝殿内に並べられた明治前期の多くの芝居絵馬もみごたえがあります。本殿は江戸時代後期ごろの一間社流造です。

境内には、元禄 13 年 (1700) や寛延元年 (1748) の石灯籠、元文２年 (1737) の石鳥居、延享元年 (1744) や宝暦８年 (1758) の手洗石、宝暦 10 年 (1760) の常夜燈のほか、力競べをした力石も残っています。入口の「熱田神社」標石は、大阪の有名な漢学者で、泊園書院院主の藤澤南岳が大正８年 (1919) ５月に書きました。

入口西側には、江戸時代のキリシタン灯籠も見られます。キリスト教が禁止されていた当時のかくれキリシタンの礼拝物といわれています。十字架形の下部にアーチ形の凸みをつけ、そこにマリア像と思われる像を刻んだものです。

熱田神社

12 頓随寺と阿弥陀如来像

独創的な虹梁架構の本堂　天竺衣・截金細工の本尊　　別所６

別所６丁目に頓随寺が建っています。真宗大谷派で、山号を鳳凰山と称します。寺の北隣りには、国の登録有形文化財に登録された中山経正さん宅があります。また、西側には、別所公民館や熱田神社がのぞまれ、神社の前は堂ヶ池を埋めた公園が整備されています。

頓随寺は、いまから 500 年ほど前の室町時代後半に創建されたと伝えられています。本堂に掛かる親鸞聖人絵像の裏書に寛文８年 (1668) の時、また、聖徳太子像や七高祖像の裏書に寛文９年 (1669) の時、本山の東本願寺 15 世である常如が、「河州丹北郡別所村惣道場頓随寺」にこれらの絵像を下したとあります。このことから、江戸時代前半にはいまのような寺の形態をとっていたようです。江戸時代を通じて、八尾の大信寺 (八尾別院) の末寺でした。

現在の本堂は、内陣と外陣の境にはめられた欄間に「宝暦六丙子七月日　施主大坂上難波町　河内や宗山」と書かれていますので、260 年前の江戸時代中ごろの宝暦６年 (1756) に建てられたことがわかります。「河内や宗山」は、もともとは別所村の人で、大坂の上難波 (大阪市中央区) で商売に関わっていたようです。熱田神社にも、河内屋奉納の元文２年 (1737) の石鳥居や宝暦 10 年 (1760) の常夜燈があります。

本堂で注目されるのは、外陣に架かる虹梁に施された雲形などの意匠が奇抜なことです。また、蟇股で支えられる虹梁が中柱の奥行のみに架けられているのも珍しいといえます。ふつう簡素な江戸時代中ごろまでの一般の真宗寺院からすると、独創性をもっています。

次に、内陣に祀られている本尊の阿弥陀如来像を見てみましょう。仏像は、寺の創建時と伝えるころとほぼ同じ室町時代後半の作です。ヒノキ材の寄木造で、高さ 69cm を測ります。全体は漆で塗られ、目にはめこまれた玉眼は水晶製です。

中でも、興味をそそられるのは、阿弥陀仏のまとっている衲衣が環をつなぎ合わせたヒモで吊られる「天竺衣」という珍しい衣装で表されていることです。そのうえ、衣装には截金細工という金箔を裁断して貼り合わせる特異な工程が施してあり、繊細で優美な作風をかもしだしています。また、仏像が立つ台座は江戸時代様式によく見られる八角蓮華座で、同時期特有の各段の重なりが 19 段と多く、ここでも蓮華に截金が施されています。

本尊の横には、江戸時代までの神仏習合期の熱田神社で祀られていた阿弥陀如来像や、堂ヶ池より見つかったと伝える「藤原光長」と刻された阿弥陀如来像も安置されています。

なお、薬医門の形式をとる表門の南側に建つ鐘楼も、本堂と同時期の江戸時代中ごろの建物です。一間四方吹放し形式の切妻造で、木柄が太く、この時期の中でも質のよい鐘突き堂として知られています。

頓随寺

13 国の登録文化財・中山家住宅

廣瀬旭荘を招き、泊園書院塾生となった別所村の庄屋　別所６

別所６丁目の熱田神社の東側に中山経正さん宅があります。中山家は、江戸時代に丹北郡別所村の庄屋や八上郡の大庄屋をつとめていました。別所村は、はじめ幕府領でしたが、宝永２年 (1705) から関東の大名であった秋元家の領地となりました。秋元氏は河内国の丹北・丹南・八上の３郡 43 ヵ村を支配しており、八上郡長曽根村 (堺市北区) に陣屋を置きました。

３郡には、それぞれ大庄屋が任命されましたが、おもに三宅村から堺市域の八上郡を中山氏が、堺市や羽曳野市の丹南郡を日置氏 (丹南郡西村、堺市東区) が、恵我地区などの松原市域や八尾市・大阪市・羽曳野市の丹北郡を吉村氏 (丹北郡島泉村、羽曳野市) が見ました。

中山家には非常に多くの古文書が残っていますが、その中に寛政 11 年 (1799) 正月以降の日付をもつ『子孫永慶弔誌簿』が伝えられています。それによると、現在の中山家の主屋は文化２年 (1805) に建てられ、奥座敷は天保元年 (1830) に増築されたとあります。主屋は桁行 19 間半、梁行５間の６間取りです。他にも、湯殿・寝部屋・寮・蔵・長屋門・裏門・長屋・塀など、近世後半の富裕な家柄にふさわしい建物がほぼそのままで残っています。このため、平成 16 年１月、中山家住宅は市内で初めて国の登録有形文化財に登録されました。

このうち、興味深いのは寮とよばれる建造物です。ここは、客人の宿泊所でした。中山家当主が文人や学者などを招いたのです。幕末ごろ、中山善右衛門経孝は九州出身で、大坂で著名な漢詩人となっていた廣瀬旭荘と親交を持っていました。

旭荘は、豊後・日田 (大分県) の私塾として有名な咸宜園の創設者、廣瀬淡窓の弟です。兄を継いで塾長となった後、堺や大坂にきて漢詩や漢学を教えました。旭荘は勤王の志士とも交わりましたが、経孝は旭荘や志士たちを寮でもてなしたのです。旭荘が中山氏に贈った「静嘉」の筆や「積善之家」で始まる中国の『易経』を出典とする漢詩文 (善行を積み重ねた家には、その報いとして子孫にまでおよぶ幸福があること) が、いまも中山さん宅に掲かっています。

明治時代に入って、経孝の曽孫の中山潔は、漢学の学問所として有名な大阪の泊園書院に入塾しました。書院は、旭荘と交遊のあった藤澤東畡が文政８年 (1825) に設立したものです。潔は、東畡の子で、当時一流の漢学者とうたわれた藤澤南岳に師事しました。

南岳は、潔との師弟関係から別所村の熱田神社の社号標石 (大正８年) を書いたほか、丹南村庄屋の松川長右衛門の記念碑 (大正５年) や天美・池内村の浦野氏墓誌銘碑 (大正７年) も書いています。また、南岳の長男・黄鵠の娘である雅子は中山家の分家に嫁いだこともあり、やはり漢学者の黄鵠は、阿保村の保田佐久三 (大阪府議会副議長) の銅像の撰文を大正 12 年 (1923) ６月に阿保神社西側の保田家につくっています。

中山家住宅　※非公開です

14 大堀八幡神社の遷座

松原ジャンクションの完成　平成の大移転　大堀３

大堀八幡神社は、南北朝時代の建武４年 (1337)、隣村・小川の深居神社から分祀されたと伝え、品陀別命 (応神天皇) を祭神としています。もともとは、大和川と落掘川にはさまれた大堀４丁目に鎮座していました。

本殿は社殿 (覆殿) の中に祀られ、江戸時代後半ごろの木造建物と考えられており、一間社流造・側面一間・浜縁付で、屋根は切妻唐破風向拝付の形状です。元禄 15 年 (1702) の棟札があったということですので、江戸時代前半までには本殿が建てられていたと思われます。現在、元禄の本殿を明治８年 (1875) ７月 15 日に修理したことを示す棟札が神社に保存されています。「奉上棟大元尊神氏子長久榮昌守護所」とあり、松原村新堂の伊藤氏が番匠 (棟梁大工) であったことを記しています。

この明治初期の補修を経て、昭和 47 年 (1972) に木造本殿はそのままに、社殿が木造から鉄筋コンクリート造につくり替えられました。同時に、拝殿も鉄筋コンクリートになりました。

大堀では、昭和 40 年代ごろから中央環状線・阪神高速道・西名阪道・近畿道・阪和道が集落を分断する形で通り、巨大な松原ジャンクションが完成しました。このため、ジャンクション近くの住民たちは、平成３年 (1991) から近くの上ノ池埋め立て地に集団移転し、神社も集落の北側に孤立化した状態になったのです。

氏子の人たちは参拝に不便をきたすようになったことから、平成 22 年 (2010) ごろより、大堀３丁目の松原市学校給食センターが移

転することにともない、この跡地に新境内地を移すことを決め、平成 27 年 (2015) ３月に恵我小学校の南西側に移転されました。

新築に際して、本殿は既存建物を修理移築して再使用することにしましたが、覆殿は鉄筋コンクリート造から、もとの木造に戻し、屋根の形状もこれまで通り切妻屋根を踏修しました。

拝殿についても、鉄筋コンクリート造から木造に戻し、これまで割拝殿になっていましたが、手狭感があったことから、石貼りの土間拝殿に変えられました。屋根も向拝が無かったので、新たに入母屋唐破風向拝付屋根に改めています。また、旧社殿は本殿と拝殿をつなぐ幣殿が無かったことから、降雨時の祭礼には苦労が多かったので、移転にあたって木造で切妻屋根の幣殿が新築されたのです。

一方、建物以外の燈籠・狛犬・手洗石・玉垣・記念碑などの工作物については、そのほとんどを新境内に移設しました。この中には、寛文９年 (1669) の刻銘のある手洗石や、宝永７年 (1710)11 月吉日・大堀武淑と記された石燈籠も含まれています。

ただ、これまで参道入口にあった石鳥居は継続使用が出来ないと判断され、旧境内地に設けられた聖地跡内に、玉垣の一部と共に集積保存されています。

大堀八幡神社

15 大堀村の教専寺

大堀の人々と歩んできた浄土真宗本願寺派　　大堀３

大堀３丁目に、浄土真宗本願寺派の教専寺が建っています。寺の近くに阪神高速道路や、西名阪・近畿・阪和道が通る松原ジャンクションがつくられていますので、町が分断され、地域の景観がすっかり変わりました。それでも、本堂１階は大堀会館としてコミュニティに利用されており、寺と人々との結びつきの強いことがわかります。

教専寺本堂に祀られている親鸞聖人の御影像裏書に「河内国丹北郡大堀村惣道場教専寺　宝暦二年二月十二日」とあることや、本尊の阿弥陀如来像が江戸時代中ごろの作と考えられること。さらに、本堂裏に宝暦 14 年 (1764)、安永９年 (1780)、享和元年 (1801) の年号が入った宝篋印塔が残っていることなどから、教専寺は宝暦２年 (1752) に親鸞聖人絵像を下付されるなど、18 世紀半ばまでには、いまのような大堀の檀那寺としての形態を整えていったのでしょう。

西本願寺に、寛政４年 (1792) ごろの『河内国末寺帳』が所蔵されています。丹北郡の項には「大堀村惣道場教専寺」と書かれています。もっとも、大堀村の家々の中には西本願寺を本山とあおぎ、教専寺を聞法道場として信仰しながら、摂津の慈明寺 (茨木市) や光永寺 (大阪市平野区) といった他地域の真宗寺院の門徒になる人々もいました。

慈明寺は、南北朝時代に後醍醐天皇に仕えた安満了願が摂津国島上郡磐手村 (高槻市) に開基したものです。江戸時代前期に現在地の島下郡下穂積村 (茨木市) に移り、末寺 30 ヵ寺を有しました。

光永寺は、戦国時代の明応５年 (1496) に建てられ、寛永３年 (1626) 以後、西本願寺の兼帯所として平野御坊の称を賜り、末寺

10 ヵ寺を持っていたと伝えています。

教専寺の山号は岸松山といいます。大和川が寺の北を堺方面に流れるように付け替えられた宝永元年 (1704) 以降、大和川の岸を意識して名づけられたのでしょうか。川辺の渡しで対岸と結ばれていました。山号を刻した旧本堂の平瓦が、本堂前の植え込みに保存されています。また、本堂軒下には檀家の大堀氏が明治 33 年 (1900)10 月、先祖の供養のために寄進した喚鐘が掛かっています。

山門横には地蔵堂があり、中に石仏が祀られています。もともとは木造地蔵菩薩が安置されていましたが、盗難にあい、いまは 4 体の石仏が見られます。このうち、舟形の半肉彫りで定印を結んだ阿弥陀如来坐像や、やはり半肉彫りで宝珠と錫杖を持つ地蔵菩薩立像は室町時代ごろのものと思われます。その地蔵に手向ける香華台には、幕末の文久 2 年 (1862) の銘があります。

なお、現在の恵我小学校は明治 7 年 (1874)、教専寺に設けられた大堀小学校をルーツとしています。これに関連して、江戸時代後半の文化 8 年 (1811) に建てられた寺子屋の先生と思われる「倉辻先生」と刻まれた筆子塚が東除川沿い、大堀墓地 (大堀 1 丁目) の無縁墓の中にあります。

教専寺

16 若林神社と若林の陣跡

河内守護の畠山氏と将軍家・戦国群雄の攻防　　若林１

室町時代の河内国は、将軍家の足利氏一族である畠山氏が守護となり、軍事・行政機関を支配していました。

この畠山氏の後継者争いから、京都で応仁・文明の乱 (1467 ～ 77) が起こったことはよく知られています。文明９年 (1477)、西軍の畠山義就は焼け野原となった京都を出て河内に脱出しました。ここに、応仁･文明の乱は一応終結します。しかし、義就が河内にやって来たことは、京都に残る足利氏や東軍の畠山政長との間で、激戦が河内で起こることを意味していました。

やがて、畠山家では義就が死去し、息子の基家がその跡を継ぎました。明応２年 (1493) ２月、政長は京都を出て基家を討つため、河内国正覚寺 (大阪市平野区加美正覚寺) に陣をおきました。

基家は古市 (羽曳野市) の高屋城におり、そこが河内支配の拠点でした。高屋城は、安閑天皇陵古墳の墳丘や濠を利用してつくられていました。このため、正覚寺と高屋城の中間地の本市域は重要拠点となり、とくに、若林は前線基地となりました。

明応２年３月２日、高屋城攻めの畠山播磨守に率いられた数千の軍勢が若林に布陣したと『蔭涼軒日録』にあります。 この時、市内では三宅にも 500 もの軍勢が配置されていました。

この明応の合戦後、政長の息子の畠山尚順が高屋城を奪い、やがて基家は自害します。その後、両畠山氏はいったん和睦しますが、大永７年 (1527)、基家の孫の畠山義堯が幕府の実力者であった細川晴元と共に挙兵し、畿内は再び混乱におちいりました。

『細川両家記』によると、天文16年(1547) 8月、晴元方の三好長慶の軍勢が尚順のあとを継いだ息子の畠山政国を高屋城に攻撃するため、摂津から河内へ討ち入り、ここでも若林に陣を取っています。この年は合戦で明け暮れましたが、翌天文17年になって三好・畠山両軍は和睦し、若林の陣も解かれるのです。

永禄3年(1560) 7月にも、三好長慶らの軍勢は、政国の後、高屋城主となった畠山高政を討つため、守口から玉櫛・若江(以上、東大阪市)に攻め寄せ、ついで太田(八尾市)・若林を経て、藤井寺に陣取りました。

このように、若林は中世史書に戦場として登場しますが、同地では若林1丁目に鎮座する若林神社が微高地の最高所にあたります。江戸時代前半、延宝年間(1673 ～ 80)の「若林村絵図」に、同社は八幡宮とあり、品陀別命(応神天皇)を祭神としています。また、いまとは比べられないほど広大な境内地が樹木で囲まれていました。鎌倉末期の元弘～建武期(1331 ～ 35)に小川の深居神社から分祀したと伝えられています。同地が小字「若林」であり、鎮守の杜が陣取場になりやすいことから、神社付近が戦略拠点にふさわしい場所だったと思われます。

若林神社

17 長尾氏が創建した本了寺

日慶の巨大な五輪塔と隠居寺で没した日泰　　若林１

大和川の土堤を南へ下った若林１丁目に日蓮宗の永喜山本了寺があります。同寺は、江戸時代初期の元和６年(1620)、若林に館をかまえていた長尾氏の菩提寺として創建されたと伝わっています。長尾館は寺のすぐ東側にありました。

長尾氏は、越後(新潟県)の戦国大名として名をはせた長尾輝虎、のちの上杉謙信につながると伝えています。謙信の死後、養子の上杉景勝は豊臣秀吉に重用されたことから、その流れをくむ長尾氏が、いまの枚方市長尾や富田林市喜志などと共に、本市の若林にも豊臣氏から土地を与えられたといわれています。

若林の初代長尾氏も輝虎とよばれ、生前から日蓮宗に深く帰依して、日存を家に招いて講義を受けたといいます。輝虎は元和３年(1617)に亡くなり、正行院了喜日慶とおくりなされました。

後を継いだ長尾三左衛門は、元和６年に日慶の菩提を弔うため、屋敷の一部をさいて寺を創建したのです。これが、本了寺のおこりで、開山に師僧の日存をあおぎました。日存は、大阪・谷町の本長寺なども創建し、摂津や河内での日蓮宗の流布に力を入れました。

朱色の山門を入り、右手に本堂を見て進むと、正面に日慶の墓があります。五輪塔正面に「妙法蓮華経」、地輪には「正行院了基日慶」の戒名と没年の「元和三年」と刻んでいます。高さ約２m50cmを測り、市域に現存する五輪塔の中で最大級のものです。当時の有力な日蓮宗信者は、このような巨大な五輪塔を各地に建てています。

本了寺を創建した長尾三左衛門は、寛文12年(1672)に没しまし

た。以後、長尾氏は日慶墓を中心として歴代の墓所をつくると共に、本了寺の維持に努めたのでした。

大和川に沿う落掘川に架かる西橋北詰に「南無妙法蓮華経」「後五百歳中　廣宣流布」「五百御遠諱　天明元年辛丑年　十月十三日」「宗祖日蓮大菩薩」「本了寺」と四面に大きく記された立派な題目石が現存しています。これは、日蓮の 500 遠忌に建てられた石塔で、天明元年 (1781) ごろの本了寺の広大な寺域を示しています。

本了寺は、のち水害にあって衰えますが、幕末になって住職となった日泰が同寺を中興しました。日泰は本了寺に入る以前、ソテツで有名な堺市堺区の妙国寺 32 代住職をつとめたり、さらに日蓮宗最古の法華経弘通の名刹、法華経寺 (千葉県市川市) の 106 代住職となった高僧でした。若林神社横にあり、江戸中期の石造十三重塔を祀る同じく日蓮宗の東池庵 (現東池寺) の住職も兼ねていました。

日泰は晩年の隠居寺として本了寺を再興して、元治２年 (1865) ２月、同寺で亡くなりました。享年 65 歳。歴代住職の墓石が建ち並ぶ一番手前に「弟子中」が建立した日泰の墓が見られます。もともとは和泉砂岩でしたが、風化が激しくなり、新しくつくりなおされました。

本了寺

18 立法寺の創建と住職

17 世紀後半に寺号や絵像を得た真宗大谷派　　若林 1

若林 1 丁目に真宗大谷派の洽照山立法寺があります。立法寺は、安政 4 年 (1857) の『自庵願いにつき諸事扣』という文書に、文禄 3 年 (1594) の豊臣秀吉の太閤検地の際、除地 (免税地) であったと記しています。この時までに道場が建っていたのでしょう。

寛永 17 年 (1640) 7 月には、東本願寺を創始した本願寺 12 世の教如の真影や本尊の「木佛尊像」を東本願寺から下付されたことが、『自庵願いにつき諸事扣』に見られます。東本願寺で書き続けられてきた『申物帳』にも、寛文 6 年 (1666) 9 月に「立法寺」の寺号と親鸞聖人絵像を下してくれるように申請が行われ、寛文 8 年 (1668) 9 月、寺号と絵像が与えられました。この絵像と同じ寛文 8 年に下された聖徳太子像や七高祖像がいまも祀られています。

このことから、立法寺は 17 世紀後半に本山・東本願寺の末寺となったことがわかります。ただ、八尾市の慈願寺、のちには同じく八尾の大信寺 (八尾別院) が本山と末寺の間に立つ中本山の立場で介在しており、二重の系列におかれていました。

歴代住職については、江戸時代前半の頃は不明ですが、享保 21 年 (1736)、義霊が八尾市福万寺の光蓮寺から看坊として寺の管理をまかされました。しかし、義霊は 5 年で寺を去り、寛保元年 (1741) には滋賀県長浜市高月町の祐存寺から来た恵暁に寺はゆだねられました。もっとも、恵暁の在任も 2 年にすぎませんでした。

寛保 3 年 (1743) 以後は、泰應が入り、のち息子の泰圓、孫の圓随が継ぎ、世襲が確立するかに見えました。しかし、明治 12 年 (1879)

に新たに榛間法海が住職になったのです。

榛間家は、播磨 (兵庫県) 赤穂の出で、大阪市平野区瓜破東の敬正寺の住職でした。すでに正徳４年 (1714) 以降、敬正寺に入寺していました。敬正寺は、瓜破に居住したと伝える道昭 (行基の師僧) が大化年間 (645 ～ 649) に建てたという永楽寺の遺跡に建つ寺でした。法海は敬正寺住職を勤めながら、立法寺住職も兼ねたのです。

まもなく、法海の父の法住は、法海の弟の法救を連れて立法寺を隠居寺としました。法救はその後、住職を継ぎ、寺を長く守ったことから、昭和５年 (1930) ３月、立法寺保存講によって「釋法救法師」の碑が境内に建てられました。

現本堂は平成 21 年４月に建て替えられましたが、旧本堂は法海が寺を継いだ３年後の明治 15 年 (1882) の建立でした。旧本堂を解体すると、明治 15 年の棟札と共に、文化７年 (1810) ９月 24 日に上棟した「本堂再建上棟札」が屋根裏に付けられていました。古市郡西浦村 (羽曳野市) の大工太郎兵衛と丹北郡大堀村 (松原市) の大工五兵衛が棟梁として普請にあたったことが記されています。文化 12 年 (1815) ２月に本堂が完成しましたが、この部材を利用して明治 15 年に旧本堂が再建されたのでした。

立法寺

19 深居神社と小川の戸閉

東除川の水利と共に生きた人々　　小川５

東除川の右岸に位置する小川の中でも、藤井寺市津堂との市境あたりはまだまだ水田風景が見られます。それも、古代の方形の土地割である条里制の跡が整然と残っています。小川２丁目の古池・西池・東池の総称である整形な三ツ池を見ればそのことがわかります。三ツ池は、条里制の農地をのち３つの区画を持つため池としたものです。

三ツ池に西接する小川１丁目や北側の小川４・５丁目の地は、小川遺跡とよばれ、古墳時代から中世に至る集落遺跡です。また、三ツ池の東側の小川２・３丁目からも、弥生時代～中世に続く遺構や遺物が見つかっています。

小川６丁目の松原ジャンクション南東の屋後遺跡からは、５世紀後半の円筒埴輪が検出されており、小川５丁目の深居神社本殿が鎮座するマウントも古墳の墳丘を想定させると共に、境内からも須恵器が見つかっています。こうしたことから、古墳時代における小川の有力者のお墓 (古墳) は、深居神社付近にあった可能性があります。

深居神社は、奈良時代の養老元年 (717) の創建と伝え、品陀別命 (応神天皇) を祀っています。棟札から、一間社流造のこけら葺きの本殿は、江戸時代前期の万治３年 (1660) に建てられました。また、小川村庄屋の谷氏が奉納した寛政５年 (1793) をはじめとする多くの絵馬が拝殿天井に掲げられています。

もともと、同社は小川だけではなく、市域の若林・大堀や津堂・川辺 (大阪市平野区) の総産土神でした。それが、元弘～建武期 (1331～35) 以降、現在のように小川だけの氏神となったのです。ですか

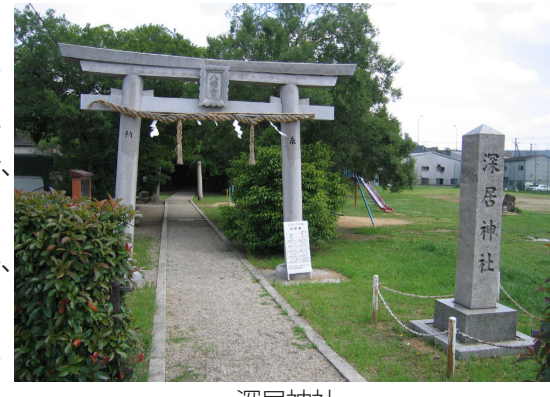
ら、深居神社から分かれた若林神社・大堀八幡神社・津堂八幡宮・川辺八幡宮の祭神も品陀別命なのです。

ところで、小川の名は、人々が東除川の水利をコントロールして農耕に生かしていったことからつけられたと思います。

小川と一津屋とを結ぶ東除川に架かる一津屋橋のすぐ上流に「小川の戸関（とぜき）」とよぶ堰（せき）が設けられていました。ここで東除川の水量が調節されて三ツ池に貯えられ、小川をはじめ、下流の若林・大堀の水田に水をうるおすことができたのでした。いまも、橋上からこの堰の跡を見ることができます。小川のトリキともよんでいます。

小川に、古代から中世を通じて恵我地方の総産土神の深居神社が鎮座したのも、同地が東除川の水上（みなかみ）として重要視されていたからでしょう。社名が「深居」と称されるのも、「居」は「井」の転化であり、農耕に欠かせない井戸（水）の神として崇められたからと推測されます。

古代、井戸は信仰の対象で、小川４丁目の正定不退寺（しょうじょうふたいじ）の南から平安時代の井戸跡がたくさん見つかっています。また、深居神社参道東側の公園に自然石が祀られています。そこは、屋後池があった所で、池は昭和 43 年に埋められましたが、この立石も水神として信仰されていたかもしれません。



深居神社

20 小川村の不退寺と正定寺

東・西本願寺を本山とする小川の真宗寺院　　小川４

小川４丁目に、真宗大谷派(東本願寺)の不退寺と浄土真宗本願寺派(西本願寺)の正定寺が法灯を続けています。両寺は、もともと現在地に隣接して東向きの建物として並立していました。

大正11年(1922)11月発行の『大阪府全志』 巻之四(井上正雄著)に、不退寺は「三十五坪の境内に本堂のみを存す」とあり、正定寺は「四十坪の境内に本堂のみを存す」と記しています。しかし、いまでは建て替えられ、正定不退寺として、１つの建造物に本堂を共有し、それぞれの本尊である阿弥陀如来立像を祀っています。

両寺の前は、大坂街道、あるいは古市街道ともよばれる古くからの道でした。寺の前には地蔵堂が祀られ、また、明治２年(1869)９月に建立された伊勢灯籠も現存しています。

不退寺は、江戸時代前半の貞享３年(1686)に僧の善入によって開基され、小川山という山号を持ちます。

正定寺は、元禄６年(1693)、小川村の庄屋であった谷與次兵衛正長によって建てられました。谷氏は、慶長15年(1610)５月10日に亡くなった「畠山源義光入道祐西」を初代とします。與次兵衛は３代で、宝永５年(1708)４月15日に亡くなり、祐願という法名が与えられました。小川墓地には、祐願など谷家代々の墓石が祀られています。

明治17年(1884)２月７日に記された『小川村村勢報告』によると、当時の丹北郡小川村の戸数は43軒とあります。このうち、両寺の浄土真宗が39軒、別に野中寺(羽曳野市)の真言律宗を信仰する家が吉永家など４軒と見られます。

現在の八尾空港が第二次世界大戦中、陸軍の専用飛行場になったことから、近くの両寺が兵士たちの宿泊所になっていたこともありました。この時、寺の多くの什物が散逸したといわれています。

本堂に入ると、向かって右手に祀られている不退寺の阿弥陀如来立像は、像高50.6cmを測り、来迎印を結びます。光背と台座は近年、つくりかえられましたが、本体は内刳りを施さない１本のヒノキからつくられた一木造で、古色です。眼は、水晶や珠玉をはめこんだ玉眼ではなく、彫眼といって、彫刻だけで眼をあらわしています。

本堂向かって左側に祀られている正定寺本尊の阿弥陀如来立像は、像高44.8cmで、やはり来迎印を結んでいます。ヒノキを寄せ集めた寄木造で、玉眼、金泥彩です。ただし、光背と台座は不退寺と同じく後補です。

入口には、喚鐘が架かっています。喚鐘は小型の釣鐘で、法会の開始などを告げるために使用されました。吊す部分の龍頭を含めた全高は50cmで、口径は34cmを測ります。池の間とよばれる表面に「河州丹北郡小川村　道場」「安永七年戌二月吉日」と刻まれています。安永７年(1778)２月につくられましたが、寺の名前はなく、小川村の道場とあります。

正定不退寺

21 小川墓地の行基ー千歳塚

行基を葬った人たちが1000年目の命日に建立　　小川1

市域東北部を流れる東除川に架かる一津屋橋の北東側に小川墓地(小川1丁目)があります。同地は、住宅に囲まれていますが、もともとは高台になっていました。昭和9年(1934)に恵我尋常高等小学校から発行された『恵我村地誌資料』によると、墓地にはマツ・カシ・タケ・カキ・アシ・ササがおい茂っていると紹介されています。

墓地を入ると、すぐ右に無縁塔がありますが、その中央下段に「行基一千歳塚」と刻まれた墓が祀られています。墓石正面上部に行基の坐像を浮き彫りし、下部に「行基大菩薩、一千歳塚」と記されたものです。右側面に「天平勝宝元年己丑二月二日入滅」、左側面には「延享五戊辰年二月二日」と見られます。

つまり、この墓石は奈良時代の高僧である行基が天平勝宝元年(749)に亡くなって1000年目の命日にあたる江戸時代半ばの延享5年(1748) 2月2日に建てられた供養塔なのです。行基は、近畿地方を中心に寺だけでなく、橋や堤防や灌漑池をつくって、民衆のためにつくしました。このため「生き仏」とよばれ、のちのちまでも信仰されたのです。とくに近世、行基信仰を広めたのは葬祭業務や墓守りに従事した三昧聖でした。彼らは、延享4年(1747)に奈良・東大寺で行われた行基一千年忌供養会に参加しました。行基が東大寺の大仏づくりに尽力したことから、東大寺で供養会が催されたのでした。

三昧聖は、勧進活動としてすぐさま各地の墓地で「一千年御忌」を勧修し、供養塔を建立しました。その1つが小川墓地にある延享5年2月2日の行基塚なのです。ですから、小川墓地は、河内で戦

後まもなくまで、行基を慕ってゆかりのある墓地を参拝する「河内七墓参り」の１つにも数えられていました。

大阪府や奈良県の墓地のあちこちに、こうした行基信仰の墓石が建てられています。丹南５丁目に接する堺市美原区大保の浄土寺墓地には、延享５年２月２日「行基大菩薩塔・一千年忌為報恩立」の供養塔があります。ここは市域の岡・丹南と、美原の太井・大保・真福寺・丹上・下黒山の共同墓地です。また、大海池畔の三宅東３丁目にある三宅・別所霊園にも「三宅行基墓地」の石柱の前左側に、延享５年建立の「行基大菩薩」の墓石が新しくつくられた行基坐像と並んで安置されています。

さらに、南新町４丁目や河合５丁目近くの大泉緑地東側の中村墓地 (堺市北区) には「開起行基菩薩」と刻まれた一千歳塚が祀られています。同墓地は、堺市北区中村や南花田などと共に布忍 (新町) 地域の更池・清水・向井・高木の共有です。

他にも、立部や西大塚などの共同墓地である小土墓地には貞享４年 (1687)10 月の「行基菩薩塔」が見られます。これは、三昧聖の元締であった東大寺龍松院の勧進活動によって建てられたものと考えられています。

小川墓地の行基一千歳塚

22 一津屋古墳と一津屋城

前方後円墳を利用した三好氏の城や砦　　一津屋５

一津屋５丁目の東除川右岸に市杵島姫命を祭神とする厳島神社が鎮座しています。境内は、マツ・クロガネモチ・アラカシなど樹種が豊富で、そのうえ市内で唯一、整った森林型を示しています。

境内は東側に濠が残り、鳥居の建つ西側が方形で、それに続く東側の本殿が小高い円丘上に建つことから、もともとは５～６世紀の前方後円墳ではないかと推察されます。

江戸時代の『河内志』に「荒墳、一津屋村に在り、御墓と曰う」とあることから、この古墳の可能性が高いでしょう。『河内志』は享保 20 年 (1735) に著された地誌ですが、この時期にはすでに墓は荒れていたのでした。現状は長径約 36 mを測り、いまでは一津屋古墳とよんでいます。神社のすぐ北側でも埋没していましたが、前方後円墳の川ノ上古墳 (一津屋６丁目) が検出されました。

ところで、厳島神社の建つ場所は小字「山城屋敷」「鐘付山」「御墓」とよばれているところです。先の『河内志』によると、「一津屋城、三好駿河守所保」と記されており、戦国時代に三好氏の城砦があったようです。

中世の同時代史料になく、また、駿河守とはだれかなど不確かなことも多いのですが、人工の造山である古墳が土塁として再利用でき、東に東除川が流れる同地は要害の地でした。ですから、「山城屋敷」の名も残ったのでしょう。現在の松原第七中学校 (一津屋２丁目) 付近には、「城の本」の小字名も残っています。このあたりに三好氏の屋敷があったとも推測されています。

三好氏は阿波 (徳島県) の三好郡を本拠としていましたが、三好長慶が畿内を支配しようとした戦国末期の 16 世紀半ばごろ、河内でも激しい戦いがくりひろげられました。

長慶は、高屋城主 (羽曳野市古市) で河内守護の畠山氏を討つため、一津屋のすぐ東北の本市若林に天文 16 年 (1547)、陣所を置き、永禄 3 年 (1560) には進軍しています。三好氏の河内攻防の過程で一津屋にも城や砦がつくられたのでしょう。

「鐘付山」という小字名も、変事があると直ちに城内の鐘を打って、「城の本」の屋敷に急を知らせたので、この名が残ったと伝えられています。いまも「鐘撞山」の扁額が拝殿内に保管されています。三好氏は、まもなく畠山氏を討って河内を直接支配しましたが、天正 3 年 (1575)、織田信長は三好氏などを討って河内を平定しました。

信長はこの時、河内の高屋城・飯盛山城や大和の信貴山城という主要な城郭をはじめ、近くの西大塚 1 丁目の河内大塚山古墳を利用した丹下氏の丹下城や松原村出岡にあったとされる松原城 (剰我城) など、各地の城や砦を破却しました。一津屋城も、遺構は検出されていませんが、こうした中世の終焉と共に姿を消したのでしょう。

巖島神社

23 漢詩文に秀でた医師北山橘庵

朝鮮通信使を歓待した文化人　　一津屋５

享保 16 年 (1731)、北山橘庵が一津屋村に生まれました。名は彰、字は元章といい、橘庵は号です。北山氏は楠木氏の一族である和田氏の後裔で、代々医者の家がらでした。

和田氏は日置荘北村 (堺市東区) に住んでいましたが、橘庵の祖父である和田正広が、一津屋１丁目の西ヶ池の東側に移りました。現在、池は東側が埋められ、恵我南小学校や恵我図書館となっています。

正広の子に和田玄昌がいました。玄昌は大坂で名医とうたわれた北山寿安に医術を学びました。このため、師より北山姓を与えられ、和田姓を棄てました。玄昌の子が橘庵で、彼も父を継いで医業に進み、大坂の橘元泰に学びました。その名声は各地に広まり、来診の客が部屋に入りきれなかったといいます。

領主である丹南藩主高木氏をはじめ、狭山藩主北条氏や岸和田藩主岡部氏など地元の大名もその評判を聞き、そのうえ彼は漢学者・詩人としても有名でしたので、橘庵を厚く処遇しました。

橘庵は大坂の詩社である混沌社の同人となり、江村北海・片山北海・頼春水・細合麗王・木村兼葭堂・篠崎三島などと交わりました。明和元年 (1764)、江戸幕府の９代将軍となった徳川家重の就任を祝うため、朝鮮通信使が来日しました。この時、大坂に着いた使節団を迎える役に当たったのが岸和田藩主の岡部氏でした。岡部氏は朝鮮国の一行を歓待するため、片山北海や 33 歳の橘庵らに詩を唱和させました。橘庵が使節とかわして集めた詩文が『鶏壇嚶鳴集』です。

また、橘庵は安永４年 (1775)、道明寺天満宮 (藤井寺市) に「河

内土師邑菅公廟碑」を建てますが、この碑文を作成したのも儒者の江村北海であり、文字を書いたのは書家の細合麗王でした。

橘庵は寛政３年 (1791)11 月 15 日、60 歳で亡くなりました。彼は、一津屋の居宅から東へ 200m ほど離れた北山家墓所に葬られました。長尾街道の北、一津屋５丁目の住宅地にいまはとり囲まれています。

北山家墓所は、橘庵の父である北山玄昌が宝暦 12 年 (1762) に亡くなったとき、橘庵が父の墓のために、つくったものです。約 30 坪 (99㎡) の中に、江戸時代から現代に至る 17 基ほどが見られます。ただ、平成 14 年 12 月に橘庵墓など４基が整備されて、模倣品がつくられ、創建時の４基はまとめて背後に置かれています。

前列中央に最も古い玄昌の墓があります。儒者の林東溟の撰文、細合麗王の書です。表面に「北山玄昌翁墓表」と記されています。

玄昌墓の手前、入口側に橘庵の墓があります。表面に「北山橘庵先生墓」と刻し、三面に事蹟を記しています。笠石をつけた高さ５尺 (152cm)、幅２尺 (61cm) の大きさで、もともとは和泉砂岩です。細合麗王の撰文、篠崎三島の書で、友人たちが彼の死を悲しみました。寛政８年 (1796)、門人たちが香華を手向けるために設けた台石も残っています。

北山橘庵墓

24 法泉寺の変遷

興正寺ー性應寺に連がる真宗寺院　　一津屋１

一津屋１丁目に、浄土真宗本願寺派の大師母山法泉寺があります。法泉寺は、もともと真言宗であったと伝えています。江戸時代後半に記された『法泉寺従開基住持法名附』に、戦国時代の天文２年(1533) に浄土真宗興正寺末となり、浄信が初代住職に就いたとあります。江戸時代まで、現本山の西本願寺でなく、興正寺 (京都市下京区) 派に属していました。富田林の寺内町にあるのが興正寺別院です。

文政８年 (1825)、13 代住職の了教は、『當寺法物記録』をまとめました。それには６代住職了楽の寛文 11 年 (1671)、本願寺 14 世寂如より、13 世の「良如上人御影」が下され、翌寛文 12 年 (1672) に親鸞の真影である「御開山御影」と「聖徳太子・七高祖真影」も下され、翌延宝元年 (1673) には本尊 (阿弥陀如来像) の「木佛尊像」が与えられています。同じ了楽の元禄 13 年 (1700) には、本願寺より「撞鐘御免」も出され、梵鐘をうつことを許されました。法泉寺には９代亮楽、10 代似泉、11 代亮泉、12 代了観の江戸時代半ばから後期にかけての住職の絵像も残されています。

法泉寺に宛てられた古文書類には、延宝元年の『木佛本尊許可状』に「興正寺門徒性應寺下河内国丹北郡一屋(ママ)村法泉寺什物」と記したり、元禄 10 年 (1697) の『袈裟許可状』や宝永４年 (1707) の『祖師像等表装許可状』に「興正寺殿御門徒性應寺殿下河内国丹北郡一屋(ママ)村」とあるなど、法泉寺は興正寺の下、性應寺の末寺になっています。

性應寺は、江戸時代まで和歌山市和歌浦にありました (明治 11 年に鹿児島県に移転)。天保 10 年 (1839) の『紀伊続風土記』には、和

歌山県下に 62 ヵ寺の末寺を記しています。南北朝時代、南朝の楠木正成の一族で、後醍醐天皇に従った安満明武が了願と改め、和歌浦に阿弥陀寺という天台宗寺院を建てたのが、性應寺の始まりと伝えています。その後、性應寺は浄土真宗に改宗し、興正寺の末寺となったのです。南北朝対立時、仏光寺と改名していた興正寺は南朝側につき、室町時代半ばまでは本願寺をしのぐ寺勢を誇っていました。

江戸時代、法泉寺は市域で唯一、興正寺－性應寺に連がる末寺でした。江戸時代初期の元和５年 (1619) ９月、性應寺の８代住職である了尊は、大坂や河内地方を巡廻しました。その折、一津屋にも立ち寄ったことが、彼の日記を収めた『西光寺古記』に見られます。

当時、了尊はのちに本願寺 13 世となる良如の教育役として京都に住していました。了尊は９月５日、一津屋の与兵衛宅の内仏に参り、２ヵ月前に亡くなった与兵衛の父、了西の忌日が７日であったので、お勤めをしました。与兵衛宅が性應寺系の道場であったからでしょう。同宅が法泉寺の前身であったと考えられます。この時期には法泉寺の寺号は与えられていませんが、了西を２代住職と伝えています。法泉寺は、のちに性應寺－興正寺末を離れ、現在の西本願寺の末寺となりました。

法泉寺

25 西野々村の地名と西法寺

丹比野の西方に広がる西布野とも称した地名　　西野々 1

古代、松原市域は丹比郡に含まれており、以来、当地周辺は丹比野と称する見渡す限りの田園風景でした。こうしたことから、丹比野には「野」という地名のついた地域が目につきます。羽曳野市の野や野々上、あるいは向野、藤井寺市に野中、堺市には野遠や野尻などが町名として伝えられています。

「野」地名は、本市東部にも西野々として見られます。同地は、江戸時代まで河内国丹北郡西大塚村の大字で、時には西野々村ともよばれました。古い町並みの中を、わが国最古級の道といわれる長尾街道が走っています。この古道に沿って西野々集落は形成されました。

こうした一連の「野」の由来は、奈良時代ごろ、丹比郡の中心的役所が現在の羽曳野市郡戸付近に置かれていたと推測すると、ここを基点に野、野々上、向野、野中といった位置関係が生まれ、地名となったのではないでしょうか。そして、それらの地域から西北にあたる地を西野々とよんだと思います。また、西野々より 3 km ほど西に集落をかまえた野遠やその西方の野尻は、これらの野より遠く離れていたことから、名づけられたとも考えられます。

ところで、西野々の村名については、西野々公民館の南側にある一頼山西法寺に興味深い史料が残されています。現在、西法寺は東本願寺を本山とする真宗大谷派で、江戸時代前半の寛文 9 年 (1669)12 月に西野々村惣道場として創建されたと伝えています。もともと、摂津平野郷の恵光寺 (現慧光寺、大阪市平野区。もとは八尾市萱振にあり、西本願寺に属す) の末寺でしたので、浄土真宗

本願寺派でした。恵光寺から看坊とよばれた輪番の役僧が派遣され、西法寺の法務をつかさどったのでした。

享保 20 年 (1735) 2 月、看坊の智玄は、『河州丹北郡西野々村西法寺什物記』をしたためました。そこには、恵光寺が萱振から平野に移り、その後、東本願寺に転派したことから、西法寺も大谷派となり、当時の東本願寺 16 世一如の御影などが西法寺に下されたことが記されています。その中に綴じられていた、延宝 7 年 (1679) 7 月付の写しには「恵光寺下河内国西布野村惣道場西法寺」と見られます。この西布野村という表記が注目されるでしょう。

江戸時代の他の西法寺文書や、西法寺門徒の西野々村同行講が所蔵する元禄 3 年 (1690) をはじめとする幕末までの史料には、いずれも西野々村とあり、西布野村は見られません。ですから、写しの誤字か当て字の可能性もありますが、江戸時代前半、当地は布を引いたような一面の野が広がっていたと意識されていたのかもしれません。

明治以後、西野々村は南接する西大塚村の一部にとりこまれました。しかし、平成 6 年の第 6 次住居表示変更によって、伝統ある西野々の地名が百数十年ぶりに復活し、西野々 1 丁目、2 丁目として現在に至っています。

西法寺

執筆　西田孝司（にしだ　たかし）

昭和 22 年、松原市上田生まれ。
関西大学大学院文学研究科日本史学修士課程修了。
主な著書に
『雄略天皇陵と近世史料』（末吉舎、平成 3 年）
『続天皇陵を発掘せよ』（三一書房、平成 7 年・共著）
『文久山陵図』（新人物往来社、平成 17 年・共著）
「河内大塚山古墳と陵墓参考地」（『松原市史』第 2 巻、平成 20 年）などがある。

協力者一覧　　北東コース

阿保神社・熱田神社氏子・安養寺・厳島神社総代・大堀八幡神社氏子会・小川墓地委員会・願久寺・教専寺・西徳寺・西方寺・西法寺・志紀長吉神社・正定不退寺・善長寺・頓随寺・深居神社氏子・法泉寺・本了寺・屯倉神社・立法寺・若林町会・若林同志会・北山敦之・三田昌孝・中山經正・保田佐久男
（順不同・敬称略）

表紙…阿保親王御廟 (『河内鑑名所記』延宝 7 年・1679 年) より

松原歴史ウォーク　1 北東コース

発行日　平成 27 年 10 月 31 日
執筆　西田　孝司
編集　松原市教育委員会
発行　松原市
大阪府松原市阿保 1 － 1 － 1
☎ 072-334-1550
印刷　株式会社　地域文化財研究所